

1998年6月

示II-161 大腸癌患者の術前血清D-ダイマー値と生命予後

獨協医科大学越谷病院外科

秋山欣丈, 大矢正俊, 中村哲郎, 小松淳二
高橋修平, 平安良博, 岩瀬直人, 高瀬康雄
三國 昇, 佐々木勝海, 赤尾周一, 石川 宏

大腸癌患者の術前の血清D-ダイマー値と生命予後との関係について検討した。95年2月から96年12月の間に手術を施行された初発大腸癌患者で、術前3日以内に血清D-ダイマー値が測定され、97年末での生死、再発の有無を確認できた129例を対象とした。術前血清D-ダイマー値1 μ g/ml以上の41例をDD高値群、1 μ g/ml未満の88例をDD低値群とすると、DD高値群では死亡例が有意に多く、他病死例を除外した癌進行度別の検討でも、Dukes CではDD高値群で死亡例が有意に多かった。術後の生存期間をKaplan-Meier法で検討すると、全129例、他病死例を除く125例、根治度AまたはBの105例においてDD高値群で生存期間が有意に短く(全て $p < 0.001$)、癌進行度別ではDukes CおよびDukes Dの例でDD高値群の生存期間が有意に短かった(それぞれ $p = 0.028$, $p < 0.01$)。術前の血清D-ダイマー値は大腸癌患者の術後の生命予後に関する有力な予後指標となり得ることが示唆された。

示II-162 大腸癌の血液凝固活性における Le^x糖脂質の役割

近畿大学医学部第一外科¹⁾, 鳥潟病院外科²⁾,
林原生物化学研³⁾

若野司¹⁾, 犬房春彦¹⁾, 足立俊之²⁾, 中谷佳博¹⁾,
中嶋章浩¹⁾, 栗本雅司³⁾, 進藤勝久¹⁾, 安富正幸³⁾

【目的】cancer cell-derived blood coagulating activity 1 (CCA-1)は癌細胞の凝固活性物質の一つで、Le^x糖脂質はCCA-1のco-factorとして働く。大腸癌組織の血液凝固活性におけるLe^x糖脂質の役割を検討した。【材料・方法】進行大腸癌症例15例より正常大腸粘膜及び大腸癌組織を採取した。組織をホモゲナイズして得られた抽出液の正常血漿における凝固時間を測定し、Le^x抗体FS01添加による凝固抑制を検討した。【結果】正常大腸粘膜はFS01添加で凝固活性の変化は認められなかった。大腸癌組織では15症例中7例において凝固活性の抑制が認められ、抑制率は最大78.4%であった。

【考察】Le^x糖脂質は大腸癌において高率に発現しているがCCA-1の酵素蛋白画分との結合の程度が異なるため凝固が抑制されない症例があると考えられた。大腸癌組織においてFS01で抑制されない凝固活性は組織因子などの他のプロコアグラントによるものと考えられる。Le^x糖脂質は大腸癌のCCA-1を介した血液凝固活性に重要な役割を果たしていることが示された。

示II-163 上部直腸癌と下部直腸癌の臨床病理学的特性およびp53とK-rasの遺伝子異常

福島県立医科大学第2外科

本田一幸 安藤善郎 遠藤良幸 音田正光 安斎圭一
佐藤久芳 吉田典行 土屋敦雄 阿部力哉

1980年から1996年までの16年間に当科で手術を行った直腸癌症例のうち臨床病理学的因子および予後について評価可能であった147例を、A群:上部直腸癌(66例)とB群:下部直腸癌(81例)の2群に分けて比較検討した。また最近の症例21例(上部直腸癌8例、下部直腸癌13例)についてp53とK-rasの遺伝子異常をPCR-SSCP法を用いて検討した。

下部直腸癌では上部直腸癌に比し性別では男性、壁深達度ではm-mpの浅い症例、組織型では中分化腺癌、DNA ploidyではaneuploidの症例が多かった。全症例の5年生存率はA群72.1%、B群57.6%で有意差はなかったが、curAの症例に限ってみるとA群の90.7%に比しB群は63.2%と有意に低かった。さらにcurAの症例をstage別にわけてみると、stageが進むに連れてA群とB群の生存率の差が著しくなる傾向にあった。p53の遺伝子異常はA群では25.0%、B群では46.2%、K-rasの遺伝子異常はA群で37.5%、B群では53.7%にみられ、いずれでもB群で高い値を示した。

示II-164 結腸癌、直腸癌の病態と腫瘍及びその近傍正常粘膜組織中腫瘍増殖因子量との関連

三重大学第二外科

岩永孝雄, 三木誓雄, 伊藤秀樹, 木下恒材, 小野 拓
石田智美, 松本好市, 鈴木宏志

大腸癌の発生部位別に患者の全身状態と、組織中腫瘍増殖因子濃度を検討した。大腸癌患者67名を結腸癌症例37例、直腸癌症例30例の2群に分類し、臨床病理学的因子、CEAとともに、術前の全身状態を栄養状態、免疫能(血中IAP値)で評価した。また腫瘍組織、及びその近傍正常粘膜組織中のIL-6、HGF、VEGF量を測定した。結腸癌群は直腸癌群に比し壁深達度が高度な症例が有意に多く、栄養学的指標やHgbが低値を示した。腫瘍組織中IL-6濃度は結腸癌、直腸癌でいずれも有意差はなかったが、腫瘍近傍正常粘膜組織中IL-6濃度はVEGFが結腸癌群で高値を示す傾向を認めた。またいずれの物質も腫瘍組織中濃度は正常粘膜組織中濃度より有意に高値を示した。以上より、腫瘍増殖能が発生部位で異なり、また大腸癌の発生部位による病態の差には周辺粘膜における腫瘍増殖性サイトカインのparacrine作用が関与している可能性が示唆された。